

藤瀬泰司（熊本大学教授）

犬童球溪と社会科教育

1. 小学校社会科教材の可能性

犬童球溪は、小学校社会科の教材として大きな可能性を秘めています。学習指導要領によると、小学校第4学年では、「地域の伝統と文化や地域の発展に尽くした先人の働きなどについて、人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに、調査活動、地図帳や各種の具体的資料を通して、必要な情報を調べまとめる技能を身に付けるようにする」必要があります。

犬童球溪は、熊本の学校教育の発展に力を尽くした人物です。そのため、犬童球溪を「地域の発展に尽くした先人」として取り上げることにより、小学校第4学年の社会科学習を充実したものにすることができます。

2. 「地域の発展に尽くした先人」の扱い方

しかしながら、「地域の発展に尽くした先人」の扱い方については、十分に留意する必要があります。全国社会科教育学会の会長を務めた棚橋健治氏は、「地域の発展に尽くした先人」の学習の陥りがちな問題点について次のように述べています。

指導案1の授業の最大の問題点は、人物の生き方に共感させ、その生き方をわがものとさせるという道徳授業になっていることである。それは社会科で形成すべき学力とは異質である。社会科はその名の通り、社会をわからせる教科である。人物を題材としても、それによってわからせるべきことは、その人物を通して見えてくるひとつの社会でなければならない。偉人の働きを強調して、その人物の生き方をとらえる力ではなく、社会の姿や変化をとらえる力をつけることが社会科の学力形成である。（出典：棚橋健治「社会科固有の役割を果たしてこそ“優れた”社会科授業になる」『社会科教育』第546号、明治図書、2004年）

「地域の発展に尽くした先人」の学習では、人物「を」教える授業に陥りがちです。その結果、社会科授業が人物の生き方をとらえる道徳授業に変質してしまうわけです。このような問題点に陥らないためには、人物「で」教える授業をつくる必要があります。そうすれば、人物を通して社会の姿や変化をよりよくとらえることができます。

3. 犬童球溪「で」教える社会科授業づくり

それでは、犬童球溪「を」教える社会科授業ではなく、犬童球溪「で」教える社会科授業をつくるためには、どうすればよいのでしょうか。結論を先取りすると、洋楽に日本語の歌詞を付けた楽曲に注目すると、犬童球溪「で」教える社会科授業をつくることができます。

犬童球溪の代表曲である《旅愁》は、オードウェイの原曲に美しい日本語の詞をのせた楽曲です。また、《故郷の廃家》も、外国生まれの原曲に犬童球溪が日本語の詞をのせた楽曲です。犬童球溪が活躍した時代、洋楽に日本語の歌詞を付けた楽曲が数多くつくられました。なぜ明治時代以降、洋楽に日本語の詞をのせた楽曲が数多くつくられたのでしょうか。この問いに対する答えを追究すると、《旅愁》や《故郷の廃家》が誕生した政治的社会的背景が見えてきます。

以上の通り、犬童球溪という「地域の発展に尽くした先人」は、社会の姿や変化をとらえる力を伸ばすことができる社会科教材として、優れた可能性を秘めています。